



日本赤十字社広島県支部×カンボジア赤十字社



ユース相互交流事業 スタディーツアー

令和8年度報告書



目次



02 - 03

事業の概要

04 - 05

実施報告

06 - 17

日本赤十字社広島県支部ユースの学びや気づき

18 - 20

カンボジア赤十字社ユースの声

21

ユース相互交流事業の振り返りと成果、今後への展望

22

その他



事業の概要

本事業は、日本赤十字社広島県支部（以下、「JRC」）とカンボジア赤十字社（以下、「CRC」）が協働して実施しているユース相互交流事業であり、両国に共通する「平和・気候変動・災害対応」をテーマに、ユースの育成と相互理解の促進を目的として実施している。

異文化交流や両国におけるボランティア活動・地域活動を通じて、参加者が国際的な視野を持ち、広く物事を見聞きしながら、課題発見能力や課題解決に向けて考える力を醸成するとともに、参加者同士の継続的なつながりを構築し、自律的な活動へと発展していくことを目指している。

本年度は、カンボジア赤十字社ユースの受入れを広島県内で実施し、平和学習、防災・減災に関する学び、地域住民との交流等を通じて、両国ユースの相互理解を深めた。

■ 実施期間

令和8年4月7日（月）～12日（日）

■ 実施場所

広島県内（広島市・江田島市・廿日市市・三原市）

■ 参加者

カンボジア赤十字社ユース 11名

日本赤十字社広島県支部ユース 12名

■ 内容

- (1) 日本赤十字社及び広島県支部の事業及び活動を学ぶ
- (2) 平和学習（広島平和記念資料館訪問・見学、被ばく講和の聴講）
- (3) 気候変動アクション（SDGsプログラムの実施、植樹活動）
- (4) 災害対応（広島市豪雨災害伝承館訪問、防災セミナーの実施）
- (5) 日本の文化や生活に触れる（江田島市での民泊体験）
- (6) カンボジア・広島ユースフォーラム

■ 訪問・受入の実施の成果と今後の課題

昨年12月のカンボジア訪問時と同じユース同士が再び交流したことで、これまでに構築された関係性を基盤に、活発な意見交換や交流が行われた。

とりわけ、江田島市でのホームステイは、日本の暮らしや文化を実体験として学ぶ貴重な機会となり、参加学生にとって価値観や行動の変容につながる契機となった。また、平和に関するプログラムでは、それぞれの地域で起きた歴史的事実や背景に目を向けるとともに、未来を担う若者として果たすべき役割について考える機会となった。加えて、現在の生活の尊さについて改めて認識し、感謝の気持ちを育む時間となった。

訪問及び受入を通じて一連のプログラムを無事に終了し、ユース同士の継続的な交流に対する意欲も一層高まっている。今後も、ユースが主体的に活躍し、将来につながる学びの機会となるよう、カンボジア赤十字社と連携しながら、継続的な交流の推進に取り組んでいく。

実施報告

「平和・気候変動・災害対応」をテーマとして、次のスケジュールによりスタディーツアーを実施した。以下では、各活動の実施内容に加え、本事業を通じて参加コースが得た学びや気づきについて報告する。

日付	AM	PM
4月7日(火)	広島県支部表敬訪問	SDGsプログラム(江田島市)
4月8日(水)	民泊先での家業・生活体験①(江田島市)	民泊先での家業・生活体験②(江田島市)
4月9日(木)	離島式後三原市へ移動	気候変動プログラム・植樹体験(三原市)
4月10日(木)	原爆資料館見学・被ばく講和聴講	広島平和公園視察
4月11日(金)	広島市豪雨災害伝承館訪問	宮島散策(廿日市市)
4月12日(土)	防災セミナー	ユースフォーラム

■ 「気候変動」：SDGsプログラム、植樹(吉元 いつは)

SDGs探求学習プログラムでは、実際に牡蠣の養殖・加工現場を見学し、カキが食卓に届くまでの労力の大きさを実感した。また、実際に海に入りながら富栄養化を改善するアマモを用いた環境保護活動についても学んだ。さらに、植樹では60本ほどの木を実際に植え、木を切り、植えるというサイクルの大切さを学んだ。



■ 「平和」：資料館訪問、講和(小山 陸)

平和記念公園では、各建造物と歴史をカンボジアの仲間に共有し、被ばく体験証言を聞いた。語り部文化が少ないカンボジアの視点と外国人慰霊碑に学ぶ原爆の影響の広さ等と一緒に訪れたからこそ学びである。



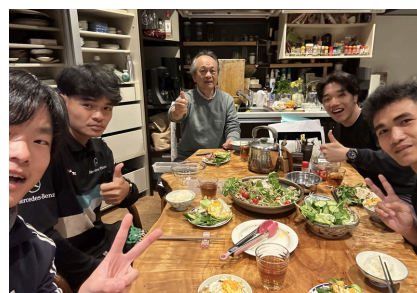
■ 「災害対応」：伝承館、防災セミナー（高畑 仁）

広島市豪雨災害伝承館では、まず伝承館が建てられた経緯を聞き、「自分のように被害を受ける人をまた発生させたくない」という熱い思いを感じ取ることが出来た。その後、バディと共に館内の展示を見学した。過去に災害が発生した地域では、経験を生かした多くの取り組みが行われており、地域住民自ら話し合い災害対策について考える重要性も実感し、自分の災害対策をもう一度見直す機会となった。



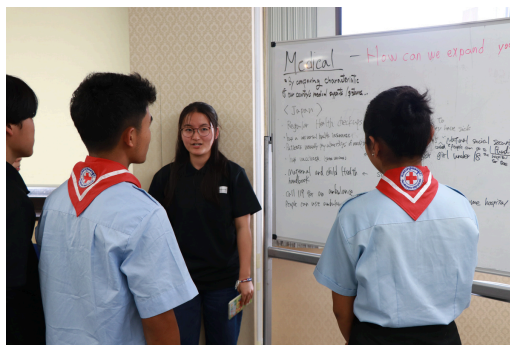
■ 民泊体験（太田 優帆）

江田島市を訪問し、各家庭に分かれて民泊体験を行った。各家庭では、地域ならではの特色ある活動や交流が行われ、参加者はそれぞれ異なる体験を通して地域文化や暮らしに触れることができた。私は、さとうみ科学館で海洋生物について学んだり、砲台山や海を訪れ、島ならではの景色を楽しんだりした。2泊3日の滞在を通して、CRCユース及びホストファミリーとの交流を深めることができた。



■ ユースフォーラム（石井 みわ）

ユースフォーラムでは、平和を主軸に医療や外交等の多角的な視点から議論を行った。他グループの発表を通じ、平和への共通項が「国境を越えた協力」であると確信した。多角的な視点を持つ重要性和対話の意義を再認識するとともに、発信力を磨くリーダーシップへの意欲も高まった。



■ 言葉だけではないコミュニケーション（太田 優帆）

この広島でのスタディーツアーで多くの貴重な経験や学びを得ることができた。1週間を通して一番印象に残っていることは言葉が通じない場面でもお互いに理解しようとする気持ちがあれば伝わることを実感したことだ。今回はカンボジアに訪問した時のように説明を聞く立場ではなく、私たちが説明や通訳をする機会が多くあった。間違っていたらどうしようという不安があり、英語で説明することに苦戦し、言葉で上手く伝えられないことも多かった。しかし、自分なりに頑張って伝えようとすると、バディーの子も聞き取ろうとしてくれた。

その中でも特に印象に残っているのは民泊体験だ。カンボジアでもホームステイはあったが、今回は各家庭に分かれて行う家業体験が丸一日あったため、より交流を深めることができた。滞在中には海で貝殻を拾ったり、山にきれいな景色を見に行ったり、カラオケをしたりするなど、さまざまな時間を一緒に過ごした。このような活動を通して自然に距離が縮まっていくことを感じた。また、民泊先の方が用意してくださったご飯をバディーの子が毎食美味しいと言いながらたくさん食べていたこと、そしてその様子を嬉しそうに民泊先の方が見ていたことが心に残った。言葉だけではなく、表情や行動でも気持ちは伝えられること、それを理解しようとすることの大切さを学んだ。この経験はこのスタディーツアーのテーマにもある平和についての自分の考えを改めるきっかけになった。平和はただ争いがないことではなく、人と人がお互いに理解しようし、安心して関われる状態があることだと思う。言語や宗教、文化の違いがあったとしてもお互いを理解しようという気持ちがあれば関係を築くことができ、この積み重ねが平和につながると思った。またこの考え方は災害にも通じると思う。災害時には状況が不安定な中で文化の違いを超えて協力していくことが求められる。相手の状況や気持ちを理解することはとても大切なことだと思う。

今後はこの経験を活かし、日常生活の中で相手を理解しようとする姿勢を大切にしていきたい。



■ 見えていなかった日本を知る体験（吉元 いつは）

今回の受け入れを通して、私は日本について新たに知ることができたと同時に、自分がまだ多くのことを知らないと感じた。

古民家でのホームステイでは、初めて火を起こして五右衛門風呂に入ったり、山へ芝刈りに行ったりと、普段の生活では経験できないことを体験した。普段はボタン一つで済むことも、薪を集め、火を起こし、湯加減を調整するなど多くの工程があることを実感した。大変さを感じる一方で、火を眺めたり自然の中で薪を集めたりする中で、自然とともに生きる暮らしの美しさにも気づくことができた。また、ホストファミリーの方から、機械に頼らず自分の力で生活することのやりがいや意味を教えていただき、自然への感謝の気持ちを持つことの大切さを学んだ。

さらに、被爆者の方のお話を聞いたことも強く印象に残っている。語り部の方のお話を直接聞くのは初めてであり、被爆体験が決して遠い過去ではなく、その方の人生に深く関わる出来事であることを実感した。壮絶な体験をされたにもかかわらず、笑顔で「知ってくれることが嬉しい」と話されていた姿が心に残っている。その経験を自分の中だけにとどめず、英語を学びながら若い世代に伝えていこうとする強い思いに触れ、私も原爆についてより深く学び、その恐ろしさと核兵器廃絶の必要性を自分の言葉で伝えられるようになりたいと感じた。

また、災害について深く学んだのも今回が初めてだった。西日本豪雨については知っていたものの、広島での被害の深刻さや、その後の復興に向けた取り組みについて詳しく知る機会はこれまでなかった。実際に被害を受けた方々が中心となって、防災に取り組んでいることを知り、自分が住んでいる地域についてさえ十分に理解できていなかったことに気づかされた。

このように、今回の受け入れではCRCのユースと共に日本や広島について多くのことを学ぶことができた。同時に、自分の国や地域についてまだ知らないことが多いと痛感した。この経験を通して、これからは日本や広島について主体的に学び続けていきたいと強く思った。



■ 頼れる仲間として（高畑 仁）

12月の渡航から約4か月、私たちは広島空港で再会を果たした。最初は若干の緊張を感じたが移動時間でそれはすぐに打ち解かれた。

今回のプログラム期間中は、自ら挑戦し、自分を大きく前へ押し出すことができたと思う。特に印象に残り、自分を成長させられたと感じる瞬間はユースフォーラムである。私はファシリテーターを務めたが、思い通りの進行は自分ではできなかった。CRC、JRCがそれぞれ準備したテーマについて話すときも言いたいことがうまく伝えられず多くの葛藤を味わった。そんな風に多くの困難があったが、もう一人のファシリテーターのJRCユースが助けてくれたこと、自分が話している中での頷きや周囲の励ましがあったからこそ、最後までやり切り、プログラムに大きく関わったことに強い達成感を得た。この機会を感じた思いを今後の赤十字との活動やその他の社会に対する貢献のモチベーションとしていきたい。

平和資料館では、過去の惨劇を学ぶだけではなく、平和への思いを共有することができたと思う。展示物を見終わって座っているときにCRCユースから「なぜ原爆を落としたのか」という質問をされた。自分にとって日本語でも答えるのが難しい質問ではっきりした返答はできなかった。しかし、その質問からCRCユースも平和に対して真剣に向き合っていることがわかり、自分たちの平和への思いを共有できた国境を越えた仲間として頼もしく感じた。

今回のプログラムでお互いの文化を知っていく中で少し考えたことがある。私たちは1週間ともに生活を送る中で食事、入浴などの場面でいくつかの「ちがい」を感じたがどれも不快に感じることはなかった。むしろ、その「ちがい」が新たな会話を生み、相手への理解が深まったように思う。しかし、宗教対立など、世界では文化的な「ちがい」が争いを生んでいることがある。宗教の違いとその他の文化の違いは同様に簡単に考えられるものではないが、「ちがい」が争いを生むのではなく、「ちがい」をどう受け止めるのかが多くの人と良い関係を築いてゆくうえで大切なんだ・・・ おそらくその重要性は多くの人認識しているはずなのに、それを十分に行動に移せてないことに若干の無力感を感じたこともある。それでも赤十字ユースとしてこのプログラムで得た経験を多くの人と共有し、相手を尊重し理解しようとする姿勢を大切にしながら、周囲の行動をより良い方向に導いていきたい。



■ 他の視点からの広島（園田 佳奈）

「将来広島で働きたい！」これは、私のペアのCRC ユースの子が言ってくれた言葉である。私は今回の受け入れを通して、いつもとは異なる視点から広島を見ることで、広島の良さを改めて知ることができた。CRC ユースたちは、トイレにある音姫や点字ブロック、マンホールなど、私たちの日常に溶け込んでいるものに興味を示してくれた。私たちにとって当たり前のもので、それらは人々を守るために重要な役割を果たしている。「生きられることは当たり前ではない」と認識しているCRC ユースと過ごしたことで、私自身もその大切さを再認識した。

江田島での民泊体験では、ワカメやレモンなどの地場産物を使った夕食を一緒に作った。また、広島で採れたレモンを使ったクメール料理もCRC ユースと一緒に作った。離れた地の文化である広島とカンボジアの文化を一つに融合できたことは、私にとってとても嬉しい経験であった。さらに、民泊先の家族やご近所の方々に、クメール料理やカンボジア研修での体験談を通して、カンボジアの素晴らしさを伝えることも出来た。今回の受け入れは、私たちJRC ユースが広島の魅力をCRC ユースに伝えるだけでなく、CRC ユースと共にカンボジアの魅力を伝えることのできる貴重な機会になった。離島式では、CRC ユースが「温かいご飯と素敵なおもてなしをありがとう」と涙を流していた。その姿を見て、温かいご飯を毎日食べられることや、温かいお風呂に入れることなど、当たり前の日常こそがかけがえのない幸せなのだ改めて感じた。そして、日本をこれまでとは違った視点で見えるようになった。このように、CRC ユースと過ごした1週間を通して、私はさらに広島が大好きになった。綺麗な瀬戸内海、美味しい海産物、美しい自然、人の温かさ、美味しいお好み焼きなど、広島を案内したからこそ、当たり前の日常の魅力を再認識し、広島の良さにさらに気づくことが出来た。

また、今回、広島県の高齢化率は30%を超え、3人に1人が高齢者であるという現状を知った。さらに、江田島市では高齢化率が約40%と特に高いことも学んだ。私はこの現状に驚くとともに、高齢者がより住みやすい街づくりを進めていく必要があると感じた。

広島を案内する前は、生まれた時から住んでいる広島を紹介することは簡単だと思っていた。しかし、私たちにとって当たり前のことでも、CRC ユースにとっては疑問に感じる事が多く、実際にはとても難しかった。だからこそ、私たち自身も知らなかったことをたくさん学び、どうすれば分かりやすく伝えられるか試行錯誤した。そして最後には、「将来広島で働きたい！」と言ってくれるほど、広島を好きになってくれた。この言葉は、私にとって本当に嬉しく、一生の宝物だ。



■ “民泊体験“で感じた、自然と人との繋がり（平野 花歩）

私たちは、ユース相互交流事業で約1週間カンボジアの子たちを広島へ受け入れた。私が主に印象に残ったことは、民泊体験である。

今回の民泊体験では、私にとって“観光”ではなく“暮らしに入る”経験であった。私たちを受け入れてくださったご家庭では、染め物体験を通して世界に一つだけの自分のバッグを作らせてくださった。色が布に染み込んでいく様子を見ながら、ものづくりには時間と手間、そして作り手の思いが込められていることを実感した。この体験は、物を大切にする気持ちを改めて考えるきっかけとなった。そして好きな色を好きなだけ使い、自由に表現できる時間はお互いの個性や感性を知ることができる素敵な時間へと変わった。

さらに、手作りのお弁当を持って「どろんこ園」と呼ばれる幼稚園を訪れ、子どもたちと一緒に昼ご飯を食べた時間も忘れられない思い出となった。初めて会った私に笑顔で話しかけてくれる子どもたちの姿から、人との距離を縮めるのは言葉よりもまず「心の開き方」だということを学んだ。他にも日本の伝統文化である茶道を体験した際には、所作の一つひとつに込められた「相手を思う気持ち」を感じ、日常の中での丁寧さの大切さに気づかされた。

さらに、民泊に受け入れてくださったご友人の畑でのいちご狩りや野菜の収穫、旬のタケノコ掘りなど、島ならではの自然に寄り添った暮らしにも触れた。食べ物がどのように育ち、どれだけの手間がかかっているのかを自分の手で感じたことで、普段何気なく食べているものへの感謝が深まった。

そして何より印象に残ったのは、島の人たちの“助け合い”の文化だ。誰かが困っていれば自然と手を差し伸べて、地域全体で子どもを見守り、生活を支え合っていた。その姿は、都会では見えにくくなっている。「共同体としての温かさ」を強く感じさせられた。

今回の民泊体験で学んだことを私はこれからの生活の中で生かしていきたい。物や人に対して丁寧に向き合うこと、自然や食べ物に感謝すること、そして周りの人と支え合いながら生きる姿勢を忘れずに生きていきたい。島で過ごした時間は、私に“暮らしの本質”を教えてくれた大切な学びへと変わった。



■ 災害との関わり方（大森 悠生）

私がカンボジアの高校生たちと話す中で印象に残ったのは、カンボジアと日本が水害という共通した課題を抱えているという点だ。

そこで私は自身の赤十字での経験と結び付け「防災」という視点を軸に今回の活動に取り組んだ。今回、私は防災教育指導者の一員として、カンボジア赤十字の方にも日本赤十字社の防災の取り組みを知り、持ち帰ってもらえるよう英語で防災セミナーを行う機会があった。自助・共助という防災における重要な要素をどう翻訳すれば理解しやすいか、限られた時間の中で平時から・避難時に行うべきことをどう紹介すれば良いかを考え、「伝え方」の重要性を学んだ。防災バッグの紹介を行った際は新聞紙を活用した保温スリッパなど、日本で実践されている身近な防災の工夫を知ってもらうことができた。DIGでは加計の土地に存在する災害リスクを地図上で視覚化し、帰国後も自分たちの地域で応用できる活動を目指した。

11日に訪れた広島県豪雨災害伝承館では、被災状況や復興の過程だけでなく、被災者の心のケアや災害の記憶を語り継ぐことの大切さを学んだ。平時には公園として、災害発生時には避難所として機能する施設の在り方からも、二度と同じ被害を生まないための工夫を知ることができた。

私は今回の経験を通して、日本赤十字社と海外の赤十字社が連携し、防災の知識や経験を共有することの大切さを実感した。

日本ではその地理的特徴から浸水害や土砂災害などが頻繁に発生する。しかし、被災体験から生まれる「いのちを守る知識」も同時に多く存在しており、それにより防災という分野が強く発展してきた。同じように、カンボジアをはじめ海外にもその土地や生活、被災経験に根ざした「いのちを守る知識」が存在するはずだ。その知識をお互いが国を越えて共有すれば、多くの被害を未然に防ぎ、より多くの命を守る事ができる。

しかし、そうした知識はその国や言語の中でしか語られないことも多い。だからこそ、英語を用いて自国の防災の知識を共有し、同時に相手の国や地域からも学ぶ活動が必要だと感じた。

日本赤十字社での活動においても、学んだ知識を自分の中だけで終わらせず、相手の国や地域の状況に合わせて伝えられるようにしていきたい。また、海外の赤十字社との交流を通して、相手の土地に根づいた防災の知恵や工夫について学び、国や言語を越えた「いのちを守る知識」をつなぐ活動をしていきたい。



■ 小さな交流が生んだ大きな学び（王野 朝陽）

今回のスタディツアーでいちばん強く心に残っているのは、江田島での民泊体験だ。ホテルに泊まるのとはまったく違って、実際の家庭の中に入って一緒に生活することで、その土地の空気や暮らしを肌で感じる事ができた。ただ見て回るだけの観光では得られない、深い学びがあったと思う。民泊では、釣りや食事の準備、畑仕事など、日常そのものに関わる活動を体験した。釣りでは思ったように魚が釣れず、自然を相手にすることの難しさを身をもって感じた。普段は当たり前のように食べているものも、実はそう簡単に手に入るものじゃないんだと気づかされた。畑仕事でも同じで、土を耕す大変さや、作物を育てるのにかかる時間と手間を実感した。こうした経験を通して、毎日の生活や食事が、多くの人の努力と自然の恵みによって支えられていることが、少しずつ分かってきた。その中でも特に印象に残っているのは、受け入れてくださった家族との関わりだ。最初はお互い少し緊張していて、会話も多くはなかった。でも、一緒に食事の準備をしたり畑で作業したりするうちに、少しずつ言葉交わすようになった。「ありがとう」といった何気ない一言が、まるで氷を溶かすみたいに距離を縮めてくれたのが印象的だった。作業中、やり方が分からないときには丁寧に教えてくださり、うまくできなくても否定せずに受け入れていただいた。そういう空気の中になると、不思議と「もっと手伝いたい」「関わりたい」と思えるようになる。人との関係は一方向的にできるものじゃなくて、お互いの行動の積み重ねで形になっていくんだと実感した。食事の時間も忘れられない。その場の雰囲気がとても温かくて、心に残っている。食卓では、自分の学校生活や将来のことについて話す機会があった。相手はそれを丁寧に聞いてくれて、考えを押し付けることもなかった。ただ受け止めてくれるその姿勢が、すごくありがたかった。この経験から、人との距離は劇的な出来事で一気に縮まるものではなく、日々の小さなやり取りの中で少しずつ近づいていくものだと感じた。今回の体験を通して、「生活」というものは単なる繰り返しではなく、人との関わりや自然との関係の中で成り立っているものだと気づいた。そして、これまで当たり前だと思っていた食事や生活環境に対して、もっと感謝の気持ちを持つべきだと感じた。これからは、この学びを日常に生かしていきたい。例えば、食べ物を無駄にしないよう意識したり、家族と過ごす時間を大切にしたりしたい。また、今回のように自分とは違う環境に積極的に関わって、新しい価値観を学び続けていきたい。この経験をただの思い出で終わらせるんじゃなくて、自分の行動や考え方にちゃんとつなげていきたいと思う。



■ 瀬戸内海と牡蠣養殖—里海を通して—（石井 みわ）

今年4月、CRCユースとの活動を通じて、私は広島・瀬戸内海の問題について改めて深く考える機会を得た。かつてカンボジアのトンレサップ湖を訪れた際、私は現地の水辺の風景から、故郷の牡蠣養殖で発生する牡蠣殻などの廃棄物を連想した。その記憶が、今回の活動で一つの問いへとつながった。

牡蠣小屋での質疑応答の時間に、私は以前から抱いていた疑問を投げかけた。「養殖用のパイプを竹や生分解性素材に切り替えることを、生産者はどう考えているのか」という問いだ。案内の方は「実現しつつある」しかし続けて「耐久性やコストの面ではまだ課題がある」と答えてくださった。

この回答は私に新たな視点を与えた。ゴミ問題に関心を持つ者として、これまでは「環境に良い素材への代替」を安易に考えていた。しかし、供給者側には、耐久性不足による筏の損壊や事故のリスク、不作時のコスト増による経営破綻の懸念がある。生産者にとって環境保護とは、日々の生活と背中合わせの切実な問題なのだ。彼らの努力だけでは、気候変動のスピードに追いつかない現実がある。

そこで重要になるのが、地域住民を巻き込んだ「里海」の再生ではないだろうか。里海とは、人が産業と自然のバランスを取りながら手入れすることで、生産性と生物多様性が高められた沿岸部のことである。沿岸の里山で里海だ。

江田島でのホームステイ中、私は「さとうみ科学館」を訪ねた。そこでは、里海の生物だけでなく、子供達が楽しみながら海を学ぶ活動が紹介されていた。その一つが、漂着ごみで筏を作るキャンプである。キャンプ中、彼らはゴミ問題のレクチャーを受けたり、ゴミ拾いも行う。そうして最後に、自作の筏を漕いで、地元の海を渡るのだ。ゴミ問題への関心と自分達で行動する力を培った子供達は地域の自然を守る推進力となることだろう。こうした地域密着型の草の根活動は、地域に深く根差し「気づき、考え、実行する」赤十字の理念と深く共鳴するものだと確信した。

滞在中、ホストファザーが「うちの海が綺麗なのは牡蠣筏がないからだ」と近所の海辺で呟いた。確かに眼前の海は澄んでいたが、私は素直に頷くことができなかった。牡蠣養殖は瀬戸内海のアイデンティティであり、守るべき重要な産業だ。「ゴミのない海」と「牡蠣養殖」は、決して二者択一であってはならない。

環境保護と産業の持続可能性。この両立という困難な課題に対し、私は赤十字の一員として取り組みたい。地域の人々に寄り添い、生産者と住民を繋ぐことで、ゴミ問題を通じた「地域密着型の気候変動アクション」を推進していく決意だ。



■ 英語力より大切なもの (小山 陸)

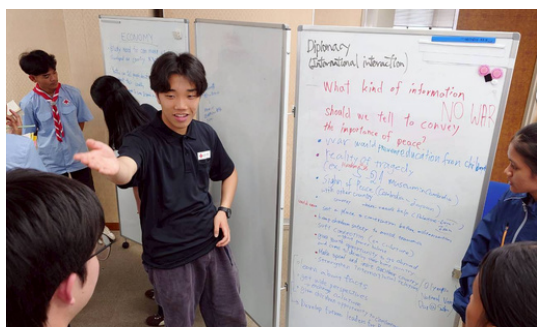
私は昨年12月の渡航を振り返り、カンボジアの仲間とのコミュニケーションを時折諦めていた自分を再認識した。異国での疲れや自分の英語力の限界、そして時間内でのやり取りの難しさなどの要因が絡み合い、相手の真意がわからないまま笑い流したり、伝えてくれたことに対するレスポンスにこだわりきれなかったりした。

そのため、今回は自分達を英語学習者の枠から解放し、対話を試みた。クメール語を積極的に取り入れ、好奇心を持って傾聴する姿勢を増やした。彼らから学ぶことを諦めず、途上国と自国の学生ではなく、同じ地球人として対等に関わるという理想を持ってコミュニケーションを取りくんだ。

すると、相手の様々な面が見えるようになってきた。ちょっとした人間関係の難しさに目が向けられるようになったり、彼らと夢を語るようになってきたりと段々とお互いの内面にも意識を向けられるようになる。そして気づいた。「私たちは皆似ていること」に。厳島神社でもアンコールワットでも喜んで写真を撮り、原爆記念資料館やトゥール・スレン虐殺博物館では感情的な時間を共有しながら学び、学校生活は嫌いなようで大好きで、赤十字の活動に誇りを持っているのだ。

思い出の一片を紹介させていただく。カンボジアの仲間の体力の余裕を察しとった私たち日赤のユースは、彼らをお風呂に誘った。すると、私たちが当たり前と思っていた風呂を共有する文化が彼らには理解可能な範疇の外に位置する恐怖体験であることに早々に気づいた。結果的に説明に20分、合意形成に30分といった具合に話が膨れ上がった。最終的になぜかタオルをズボンの上から腰に巻いて安心感を感じたようでそのまま大浴場の扉を皆で開けるに至った。ただ、現地実身を帯びて再発した恐怖に打ちのめされたようで大浴場の入浴を断念する運びとなった。元来、風呂を共有する文化のないカンボジアの文化的価値観と、日本の銭湯文化は、面白いくらいにずれていたようである。討論の時間とその後お互いに茶化しあった時間は忘れない。

お互いに同じ人間であり友であり、信頼や、私たちにしか価値を測れない時間を共有したからこそ、この違いを本気で楽しむことができたのだと思う。私は今回、英語力以上に、「相手を理解しようと諦めない姿勢」こそが、対話において最も大切なのだと実感した。



■ 復興と平和（齋藤 凜）

私は前回のカンボジア訪問に続き、今回の広島での受け入れでも「平和」について中心的に活動に参加した。今度は自分が発信者側であることを自覚し、前回のカンボジア現地で感じたことや学んだことも踏まえて「相手にどのように伝わるのか」という視点を持って行動することを大切にしたい。

活動の一つとして、平和記念資料館を案内した。私は英語が決して得意というわけではなく、拙い説明になってしまった部分も多かったと思う。しかし、カンボジアのユースは展示されている写真や遺品、解説文を真剣に見つめ、静かに頷きながら原爆の惨状と向き合ってくれていた。

そんな原爆資料館で私が特に見てもらいたいと思っていた場所がある。それは、広島「復興」に関する展示だ。原爆によって壊滅的な被害を受けた広島が、どのように立ち上がり、現在の街へと復興していったのか。その過程には、多くの人々の努力や、「二度と同じことを繰り返してはならない」という強い思いが込められていると思う。しかし実際には、原爆被害の悲惨さを伝える展示に比べると、復興の展示は短時間で通り過ぎることになった。もちろん、原爆の被害を知ることは極めて重要だ。被爆者の苦しみや戦争の恐ろしさを知ることは、「戦争や核兵器を繰り返してはならない」という最大の警告であり、資料館の中心的な役割であると思う。

ただ、多くの人々が「被害」や「戦争中の惨状」に強く目を向けている一方で、「復興」に目を向ける人は比較的少ないのではないかと考えた。しかし「復興」もまた、平和を考える上で非常に大切なメッセージなのであり、「戦時中の惨状」が「戦争」を発信しているならば、「復興」は「平和」を表していると思うのである。

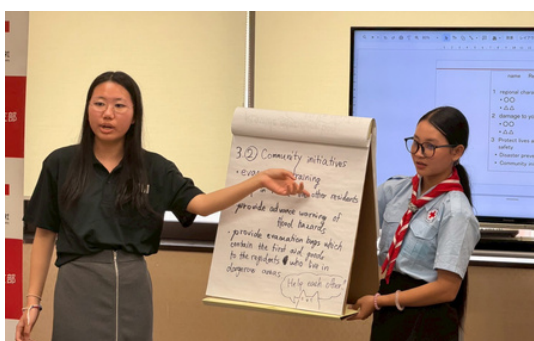
世界では現在も多くの紛争や攻撃が起きている。しかし、それぞれの地域で被害の形は異なる。広島は原爆という形で大きな被害を受けたが、それは戦争による被害の一例に過ぎない。だからこそ、歴史はただ振り返るだけでは意味がないのだと思う。過去から学び、その学びを現在や未来にどう繋げていくのが重要なのではないかと考えた。

広島の人々は、原爆によって全てを失った状況から、血の滲むような努力を重ねて今の街を築き上げた。「次の世代には同じ思いをさせてはいけない」という願いを持ちながら、一歩ずつ復興を進めてきたのだと思う。そして今、私たちはその努力の上にある平和な広島で生活している。私は、この「復興によって創られた平和な街」という事実こそ、世界中の人々に知ってほしいと強く感じた。

また、広島「復興」の過程は、現在困難な状況に置かれている地域にとっても希望になるのではないかと考えた。「ここまで破壊された街でも、人々の力で再び立ち上がることができた」という事実は、未来への希望や勇気に繋がるはずだ。復興の方法や、人々がどのような思いで街を再建したのかを知ることが、これから復興を必要とする地域にとって参考にもなるのではないかと感じた。

今回の活動を通して、私は「平和」という言葉を考える際に、「被害を知る」とだけでなく、「その後どう立ち上がるのか」という視点も大切なのだ学んだ。そして、平和資料館は単に悲惨さを伝える場所ではなく、「平和を守り続けるために何ができるのか」を考える場所なのだと感じた。

私は将来、国際関係や看護・保健分野に関わり、世界の紛争や貧困などの問題解決に携わりたいと考えている。その際にも、今回学んだ「復興」という視点を忘れずにいたい。他国の平和学習を行う時も、被害だけでなく、その後の人々の歩みや希望にも目を向けながら学んでいきたいと思う。今回の活動は、私にとって「平和」をより広い視点で考えるきっかけになった、とても貴重な経験であった。



■ 「知る」ことの真価（知久 遥）

私は本事業を通じ、他者を「知る」ということの本質について、これまでの常識を覆す新たな価値観を得ることができた。本事業の最大の特徴は、日本とカンボジアを隔年で相互に訪問し、2年間を通して「環境を変えて同じ仲間と再会する」という仕組みにある。単なる一時的な友情に留まらず、互いの国の生活環境を実体験として共有することで、対等な目線から文化や心の深層に触れる交流が可能となったのである。

大学入学後、私は留学や課外活動を通じて積極的にコミュニケーションの幅を広げてきた。しかし、国籍や年齢を問わず知人が増えていく一方で、どこか「友達の輪を広げているだけ」という感覚が拭えず、相手の真の人間性や価値観にまで踏み込めているのかという葛藤を抱くようになった。そんな折、互いの生活圏に身を置き、同じ目線で感じる「本当の異文化交流」を追求したいと考え、本事業への参加を決意した。

実際にカンボジアを訪れた際、私は自身の生活圏とは正反対の景色や食文化、そして地域社会の強固な繋がりに圧倒された。現地のユースと共に生活を送る中で、自身の価値観を根底から揺さぶられ、時には自分自身の軸を見失うほどの衝撃を受けた。しかし、この「自分を見失う」という感覚こそが、既存の固定観念が打破され、新たな自分へと更新されていく「変化」の瞬間なのだ強く実感したのである。

今回、ホスト側としてカンボジアユースを迎えた際には、言語の壁や日本特有の「暗黙の了解」を伝える難しさに直面し、葛藤を経験した。しかし、こうした困難こそが異文化交流の本質的な醍醐味であると、今では確信している。自分の「当たり前」が通用しない環境で悩み、衝突を恐れずに対話を重ねるプロセスを経て初めて、表面的な理解を超えた何かが心に刻まれるのだ。そうして形を変えていくものこそが、真の意味での価値観の形成なのだと学んだ。

この学びは、私が志す看護の道にも深く通じている。看護において一人の人間を深く知るためには、病状だけでなく、その背景にある生活や人生観に寄り添うことが不可欠だ。そこには困難や戸惑いも伴うが、医療者としての先入観を捨て、同じ目線に立とうとする真摯な姿勢こそが信頼関係の礎となる。今後はこの経験を糧に、どのような環境においても他者を「知る」ことに貪欲であり続け、変化する自分を楽しみながら、豊かな人間性を備えた看護職として成長し続けたい。



■ 人と人とのつながり（菅 彩華）

人と人とのつながりの大切さを実感したプログラムとなった。

昨年12月までは名前も顔も知らなかったカンボジア赤十字ユースのメンバーと現地で出会い、時間を共にし、そして今回広島で再会できたことは、私にとってとても特別な経験であった。このプログラムに参加していなければ、国籍も年齢も異なる彼らと出会うことはなかったと思う。そのような出会いが実現したことに、大きな意味を感じた。

特に印象に残ったのは、一度できたつながりが国境を越えて続いていることだ。カンボジアから帰国した後、「いつかまた訪れたい」と思っていたが、今回日本で再会したことで、その思いはさらに強くなった。また、このようなつながりが将来、平和活動や国際協力の場で生かされる可能性があると感じた。短期間の交流であっても、人との出会いがその後の考え方や行動に大きな影響を与えることを実感した。そして、この経験は私にとって国際交流の意義を改めて考える機会にもなった。

広島は原爆による被害を、カンボジアは大量虐殺という悲しい歴史を経験している。そのような背景を持つ両国の若者が交流し、平和について考え、行動することには大きな意義があると思う。今後、日本とカンボジアのユースが協力して平和活動に取り組む機会があれば、とても意義深いと感じる。

今回の経験を通して、自分にとっての「当たり前」が、他の人にとっては当たり前ではないことを改めて実感した。私は今後、看護師として働く予定だ。外国人患者さんと関わる際には、日本の医療環境に不安を感じているかもしれないことを意識し、相手の立場に立って考え、安心できるような支援をしたい。

これからも、このプログラムで得たつながりを大切にし、多様な価値観を尊重しながら、人と人とを結ぶ存在になりたいと思う。今回の貴重な経験に心より感謝している。





カンボジア赤十字社ユースの声

■ ホームステイでの学び・印象に残ったこと

- ・ ホストファミリーが本当の家族のように接してくれて、とても温かい気持ちになった。
- ・ カンボジアの家にいるように安心して過ごすことができた。
- ・ 一緒に食事をしたり、日本料理を教えてもらったりして、日本の日常生活や文化を学ぶことができた。
- ・ ピザ作りやスーパーでの買い物、山や海への外出など、日本でしかできない経験がとても印象に残っている。
- ・ 言葉が通じなくても、表情やジェスチャーを通して気持ちが伝わり、とても嬉しかった。
- ・ ホストファミリーの笑顔や一緒に食べた料理が今でも忘れられない。
- ・ 短い時間だったが、本当の家族のような深いつながりを感じることができた。
- ・ 別れる時はとても寂しく、また会いたいと思った。



■ 特に印象に残ったプログラム

- 広島平和記念資料館で被爆の歴史や平和の大切さについて学んだことが最も印象に残った。平和な世界のために自分たちが何ができるかを深く考えるきっかけになった。
- 防災プログラムが特に印象に残った。地震や豪雨災害への備えについて学ぶことができた。
- 広島で原爆の歴史や災害への備えについて学び、多くの命が失われた過去と、防災の重要性について深く考える機会となった。
- ホームステイでは、日本の生活や文化を実際に体験することができ、とても多くの学びと思い出ができた。
- 日本の街はとてもきれいで、人々は親切で思いやりがあり、そのことが強く印象に残った。
- 宮島では、美しい景色や多くの外国人観光客、日本の伝統的な建物や文化を見ることができ、とても印象的だった。
- 今回の活動はすべてが新しい経験であり、どのプログラムも強く心に残っている。
- ホームステイでは、日本食を食べたり家事を体験したりする中で、本当の日本の家族の一員になったように感じた。



■ スタディーツアー全体を通して学んだこと

- 平和の大切さや国際交流の価値について深く学び、自分自身も世界に貢献できる存在になりたいと感じた。
- 防災や自然災害への備えについて学び、自分の身を守る方法や災害時に助け合うことの重要性を理解した。
- 異なる国の人々が協力し支え合う姿を通して、チームワークや助け合いの大切さを学んだ。
- 日本の歴史や文化、日常生活、異文化理解など多くのことを知ることができた。
- 広島で原爆の歴史を学び、多くの命が失われた過去や平和の尊さについて深く考える機会となった。
- 日本の牡蠣養殖など地域産業について学び、人々の生活を支える工夫や努力を知ることができた。
- 新しい文化や環境に挑戦する中で、自立心や責任感、問題解決力を身につけることができた。
- 時間を守ることの大切さや、人を尊重する姿勢について学ぶことができた。
- 新しい人とのコミュニケーションを通して、自信を持って行動できるようになった。
- 自国の文化や故郷を大切にしたい気持ちや、周囲の人や環境を思いやる気持ちがより強くなった。



この経験を今後どのように活かしていきたいか

- スタディーツアーを通して学んだ平和や異文化理解の大切さを、地域や周囲の人々へ伝えていきたい。
- 防災や災害への備えについて学んだ知識を、地域社会や周囲の人々に共有し、役立てていきたい。
- この交流を通して得たコミュニケーション力やリーダーシップ、チームワークを、今後の学業や日常生活に活かしていきたい。
- 日本赤十字社とカンボジア赤十字社のつながりを今後も大切に、将来的にも交流活動へ関わってきたい。
- 新しい環境に挑戦した経験を通して、自信や責任感、自立心をさらに高めていきたい。
- 学んだことを次世代のユースへ伝え、若い世代が学びや社会活動に積極的に参加できるよう支えていきたい。
- 自国の文化や伝統を大切にしながら、社会や国の発展に貢献できる人になりたい。
- 今回の経験を将来の進学や仕事、そして社会貢献につなげていきたい。



ユース相互交流事業の振り返りと成果、今後への展望

昨年12月には、JRCユースがカンボジアを訪問し、CRCシェムリアップ支部ユースとの相互交流事業「スタディーツアー」を実施した。現地では、トンレサップ湖の訪問や平和に関する学び・意見交換、学校訪問、文化交流などを行い、互いの国や価値観への理解を深めた。また、現地ユースとの共同活動やホームステイ等を通して、言語や文化の違いを越えたつながりを築くことができ、参加者にとって国際理解と主体性を育む貴重な経験となった。

それから4か月後、JRCユースとCRCユースは広島空港で再会を果たした。はじめは少し緊張した様子で言葉を交わしていたものの、すぐに打ち解け、活発にコミュニケーションを取る姿が印象的であった。広島の街並みや文化、日常の風景など、目に映るものすべてが新鮮であったようで、広島を訪れることができた喜びを感じている様子であった。

今回の受入では、昨年5月の初めての事前研修時から見てきたJRCユースの成長を非常に実感した。訪問先での日英通訳、民泊体験先でのCRCユースのサポート、防災セミナーやユースフォーラムでのファシリテーターなど、それぞれが「自分たちが相手へ伝える」という意識を持ち、自ら学び、主体的に行動していた。中には、思うように英語で伝えることができず悔しい思いをしたユースもいたが、それは挑戦から逃げることなく真剣に向き合ったからこそその経験であり、次につながる大きな学びであったと感じる。

また、JRCユース・CRCユース双方から、「当たり前の日常への感謝」や「相手に伝えようとする気持ちの大切さ」といった感想が多く寄せられた。カンボジアでのホームステイ、日本での民泊体験を通して、それぞれの生活や文化に直接触れた経験は、ユースたちの心に深く響き、自分たちの日常を改めて見つめ直す機会となった。

さらに、カンボジアにおけるクメール・ルージュ政権下での虐殺の歴史、そして広島における原爆投下の歴史など、背景や出来事は異なるものの、多くの命が失われた過去を学んだことで、平和への想いをより一層強くしている様子が見えかけた。歴史を学び、互いの経験や想いを共有することで、「平和を次世代へつないでいく」という共通の意識が育まれていた。

今後は、本事業を通して得た学びや経験を、ユース自身の活動へとつなげていけるよう支援していきたい。互いに刺激を受けながら成長した彼らが、主体的に地域や社会へ働きかけ、平和や防災、人道の輪を広げていくことを期待している。

最後に、本事業の実施にあたり、多方面から多大なるご理解とご協力を賜りました皆様に、心より感謝申し上げます。

菅原 来実



その他

日本赤十字社広島県支部ホームページ
ユース相互交流事業ページ



ユース相互交流事業の様子

